

『破廉恥ゲーム～エロゲのヒロインみたいに～』

著:西野 花

ill: 神葉理世

浴室のバスタブで湯に浸かりながら、世良は真剣に考え込んでいた。

自分が彼にしてやろうと思っている事は、果たして効果があるのだろうか。笑われてお終(しま)いではないだろうか。泰河のオタク度合は、一般人の自分からするとちょっと理解できないところにあるような気がした。

「いや……、でも、俺が怒ってるっていう事は伝えないとな」

何もしないでいたら、本当に何も伝わらないものだ。これから同居するのだから、そういった遺(い)恨(こん)は残しておかない方がいい。

「せっかく用意してきたんだし」

そこまで準備する自分もどうかとは思うが、あの時はむしゃくしゃして、つい勢いで購入してしまったのだ。貴重な貯金を切り崩してまで。

やるったら、やる。

そう決心して、世良はザバツ、と音を立ててバスタブから立ち上がった。

浴室から出ると、世良は泰河の様子を窺(うかが)う。彼は部屋に戻って作業をしているらしかった。割り当てられた自分の部屋に戻ると、世良はまだ開けていないダンボール箱の中からビニールの袋を取り出した。そこから現れたのは、レースとシフォンをふんだんに使った衣装。

魔法少女ミスティ・セイラの衣装だ。もちろん女物。

一応サイズを確認して買ったのだが、本当に着られた時はびっくりした。こういうものにも、ちゃんと需要があるらしい。

世良は恥ずかしいのを我慢してその衣装に袖(そで)を通した。以前、学園祭のイベントにノリで女装をした事があるが、その時は異様にウケたものだった。特に、一部の女子達の目がちょっと尋常じゃなかった。

今はたまたま髪を長めにしているし、そんなに見苦しくはないと思うのだが、これが泰河に通用するかどうかはわからない。

黒のニーハイソックスまで着用して、世良はそっと自室を出た。隣の部屋まで何故か足音を忍ばせていき、そっとノックをする。

「入っていいぞ」

中から声がしたので、世良はドアの取っ手を掴んだ。部屋に入ると、机でパソコンに向かっている泰河の背中が見える。その画面には、可愛らしい半裸の女の子の絵があった。

「ん？ どうし……」

振り返った泰河が、ぎょっとして固まったのが見て取れた。

「『あなたの精気をちょうだい』———だっけ？」

セイラが主人公にセックスをねだる時の台詞(せりふ)だ。言ってはみたものの、その瞬間、猛(もう)烈(れつ)な恥ずかしさに襲われる。だが、世良はそれを振り切るようにして告げた。

「お——俺の事、こういう目で見てたんだよな」

「え？」

泰河は一瞬何を言われたのかわからない様子だったが、食い入るように世良の姿を見つめてから言った。

「セイラの事か？」

「さっき、泰河はあんな事言ってたけどさ、昔の俺はあれでけっこう素直に喜んでたんだよ。なのに、ああいう変態ゲームに使うなんて信じられないっていうか」

世良は今になって後悔し始めていた。最初は、この姿で責める事によって、泰河が恥(はじ)を感じてくれたらいいと思っていたのだ。だが実際は、物凄く恥ずかしいのは世良の方である。泰河は、どれだけ興味深いのか、じっと世良のセイラ姿を見つめていた。いたたまれなくなった世良は、しきりにスカート裾(すそ)を引っ張ったりしている。

「……で、その格好は、何？」

冷静に問われて、世良はぐっ、と言葉をつまらせた。

「お前セイラの格好似合うなあ。実は男の娘(こ)なんだとか言われても違和感ないけど」

「そんなんあるわけないだろ！」

まずい。主導権が握(にぎ)れない。

世良は焦(しょう)燥(そう)にまみれつつも声を荒げた。泰河にはダメージを受けている様子がない。これでは、単に世良がみっともないだけだ。

「……っ」

そんな事を思っていると、次第に泣けてきてしまう。

これでは俺が恥(ち)をかく一方だ。

いや、駄目だ。とにかく世良が怒っているという事を思い知らせてやらねば。

そこまで思っふと、だったら何もこんな格好しなくてもいいんじゃないかと考える。

——いや、我に返るな！ 返ったら負けだ！

そう自分に言い聞かせてみるものの、世良はやはり羞(しゅう)恥(ち)に負けた。

「だよな。悪かったよ。いきなりこんなコスプレして部屋に入ってきて、なんだって思うよな。うん、俺が馬鹿だったんだよ。思い違(ちが)いだった。今のは忘れて」

そうと決まればさっさと退却(たいせつ)するに限る。

さっき風呂場であれほど考えたのはなんだったのだろう。単に赤っ恥(ち)をかいただけで終わってしまった。

そのまま泰河の部屋を飛び出していこうとしたのに、世良にはそれができなかった。泰河が世良の手を強く握(にぎ)ってきたからだ。

「……っえ」

「びっくりした。いきなり言い当てられるとは思ってなかった」

「……泰河？」

泰河はどこかせっぱつまったような目をしていて、その目の奥(おく)がぎらぎらと光っていた。正直(まこと)言って、怖い。

「お前の言う通りかもしれない」

「——」

「お前の事、小さい時から可愛いなあって思ってた。引かれると思ってたから言わなか

ったけど」

頭の中が、一瞬にして真っ白になる。今、彼は何と言ったのだろう。少なくとも自分がこんな格好をしている時に言って欲しい言葉ではなかった。いや、わざわざこんな格好で現れたのは自分なのだが。

「同居するって聞かされた時は、お前と暮らすなんて我慢できなくなったらどうしようって思ってたんだけど……」

「あ、……そ、そうなんだ……」

世良は顔中を真っ赤に染めて俯(うつむ)いた。

まさかこんな展開になるとは思ってもみなかったから、心臓の高鳴りが止まらない。顔も熱くてたまらなくて、頭の中もどこかぼろろとしてしまっていた。

「……それで、わざわざこんな格好してきてくれたって事は、セイラと同じ目に遭いたって意味か？」

「えっ!？」

世良は驚きのあまり、朱に染まった顔を上げてまともに泰河を見てしまった。

「いや、違うだろ！」

確かに世良は彼のゲームであらぬ事をしてしまった。それはもう否定しないが、いきなりそういう話になるのにはついていけない。だいたい、自分がこんな格好をしたのは彼に恥を感じて欲しかったからだ。

「違うのか？ なんで？」

「なんでって……」

泰河はあまりにも堂々としていた。自分の趣味や性癖について、恥じるところが何もないのかもしれない。

「お前さ、もしかして、セイラのコスで俺の前に出てきて、俺に恥ずかしいと思わせる作戦だったのかもしれないけど、セイラのコスなんてイベントで何人も見てるんだよな」

「あ」

失敗した。そういう状況を想定してなかった。

「でも、今まで見たどんなレイヤーよりもお前が一番可愛い。本物のセイラみたいだ」

「お、俺に……、エロい事するの？」

「うん、したい。お前にしたいと思ってた事を、ゲームでセイラにしてたんだ。駄目か？」

率直で真っ直ぐな要求に、世良は言葉を失った。

本文 p48～55 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>